



東小だより

ともに伸びる 元気な子ども since 2018

新発田市立東小学校

令和8年10月27日

令和8年度 第7号

<http://higashi-e.shibata.ed.jp/>

小さくても、大きな一歩

校長 五十嵐 潤

今年、ノーベル化学賞の受賞が決まった硯合憲三さん。生命の起源にも関わる大きな謎の解明につながる発見をされました。その研究は、長い年月をかけて積み重ねられたものです。ごくわずかな分子の偏りが、ある反応を通して大きく増幅されるという現象を明らかにしました。小さな違いが、やがて大きな違いへとつながっていく。その成果は、長い時間をかけて一つのことを追求することの大切さを教えてくれます。

このことは、子どもたちの成長に、どこか似ているなぁと感じました。昨日までできなかったことが、今日できるようになる。あきらめていた苦手なことに、もう一度挑戦してみる。だんだん友達と仲良くなっていく。こうした変化は、一つ一つを見れば小さなものかもしれませんが、その小さな一歩が積み重なることで、子どもたちは確かに成長していきます。そして「できるかも」と手応えを感じていきます。

一方、わたしたちは、なかなか思うようにいかないことにも出あいます。よくないと思っても行動を変えられない。友達との関係がうまくいかない。自分の思いが相手に伝わらない。「なぜ自分だけうまくいかないのか・・・」 そんなときは、どうしても早く楽になりたいくて、慌てて答えを出そうとしたり、物事を白か黒かで判断したりと、結論を急いでしまいます。

心理カウンセラーの中島輝さんは著書『「知らんがな」の心のつくり方』の中で、何事も明確な答えを出そうとするのではなく、曖昧なまま受け止めることの大切さを説いています。「知らんがな」（関西弁ですが）という言葉には、どうにもならないことを少し脇に置き、気持ちを楽にする働きがあります。

もちろん、問題や現実から目を背けたり、解決すべきこと、やらなければならないことを放っておいたりしてよいということではありません。ただ、自分の力だけではすぐに変えられないことや、相手の気持ちのように簡単には分からないこともあります。そんなときにはすぐに結論を出さず、「今は分からない」「もう少し様子をみてみよう」と、落ち着いて構え、考える余裕があってもよいのだと思います。

子どもたちは、一人一人違います。成長の速さも、得意なことも、心の動きも違います。

「正解のない時代」と言われていますが、だからこそ、答えを急がず、違いを認め、共に考え、歩んでいく。子どもたちが自分らしく成長していけるよう、一人一人の小さな一歩を大切にしていきたいと思います。